

# 集う、起業家たち

きらめき人

南三陸で高品質なワインの製造に挑む熱き醸造家

しょうじ 勇太さん



入谷に植えられたブドウたちはすくすくと育っていて、今年初収穫の予定

**町** 内でワイン用ブドウの栽培生産し、同じく町内に醸造所（ワイナリー）を建て、南三陸産ワインの製造に取り組む『南三陸ワインプロジェクト』。栽培から醸造まで、ワイン生産に係る幅広い業務を担当するのが、2017年8月から地域おこし協力隊に着任した正司勇太さん。早くも3年の任期の半分が経過した。

前月紹介した佐々木道彦さんと共にまい進するワイナリープロジェクト。2月には『南三陸ワイナリー株式会社』が設立され、ますますの活躍へ期待が高まっている。勇太さんは着任から仙台市の秋保ワイナリーに通い、ワイン用ブドウの栽培とワインの醸造についてひたすらに研修を積んできた。今年度は仕込みから瓶詰まで、一連の作業を自身で手掛けた初となるワインの醸造に挑戦し、各所から高評価を得ている。この春にはいよいよ、待望の一般販売も開始予定だという。

千葉県出身の勇太さんは関東で一般職に勤める傍ら、ずっと好きだったワインの製造へ憧れを抱いていた。いくつかのワイナリーに勤めた後、南三陸でのワインの取り組みを知り、移住・着任となった。ワインへの情熱と愛情が、勇太さんの職業的な活動に取り組む姿勢の原動力だ。

「ワインはその年のブドウの出来によって味が変化するんです。それを見定めて、南三陸の風土に合ったワインを作っていきたいと思っています！」

YUUTA SYOUJI



昭男さんは、現役を引退してからも草刈りや薪づくりのほか、得意な木工品作りを楽しんでいる。桂子さんは、川端康成の小説が大好きな博学女性。手料理も得意で、特に栗団子は絶品だ。

AKIO ABE・KEIKO ABE

**気** 仙大工の技を継承した阿部家（入谷重子）三代目の昭男さん。手がけた住宅は、8年前発生した東日本大震災の巨大地震にもびくともしなかったと胸を張った。「幼い頃から親の姿を見て自然に大工の技を身に付け、手伝っていた。小学生の頃、学校の机などは俺が作ったんだ」と豪快に笑う。「四代目は大工にはならず、デザイナーとして仙台に行ってしまった。孫も北海道のハウスメーカーに勤めている」と2人暮らしが少し寂しそうだが、ひ孫の写真を飾り、電話で話すのが楽しみだ。

妻・桂子さんは、奥入谷（現十区）から嫁いだが、勝手の違う生活に戸惑いながらも懸命に家事にいそしんだ。季節の移ろいや日々の出来事を題材に傘寿を迎えた現在も俳句や短歌を楽しんでいる。小学校2年生の頃に初めて作った句『梅の香に 誘われて まわり道』が原点だと言う。

同居していた義母が体調を崩してからの18年間は、常盤旅館（志津川町塩入）で仲居をしながら献身的に看病・介護をした。亡くなる直前「お世話かけたな」と言われたのがありがたかったという。くしくも命日は桂子さんが嫁に来た日と同じだった。

お2人に元気の秘訣を聞いてみた。昭男さんは「体を動かすことだな」桂子さんは「俳句や短歌を詠むことが私の栄養剤！」とどちらも笑顔で答えた。

『木もれ陽に 老母の笑顔の すこやかに 膝掛なほして 押す車いす』

阿部 昭男さん 桂子さん